

令和元年度 学力調査結果の分析

【国・都・市調査】
清瀬市立清瀬第五中学校

教科	学年	観点別結果の分析	領域別結果の分析
国語	第1学年	「書く能力」における「自分の考えが伝わるように図表を用いることができる」という、表現力と共に問われる部分の正解率、さらに、無解答の人数の多さも顕著であり、問題文の意図がわからずに、戸惑った生徒が多くいたことがうかがえる。作文に対する苦手意識もあり、短文から書く指導を行う必要がある。	「読むこと」に関しては、市や全国の正答率よりも下回っている。しかし、大幅な差があるわけではないため、苦手意識をもっている生徒の読み取る力を醸成していくことで、改善が見込まれる。文章中の根拠を元にして解答するような指導を行っていく必要がある。
	第2学年	昨年度低かった「読む能力」は都平均を上回った。文章の表現、指示語、構成など読解の基礎的スキルの演習に重点を置いたことの成果か。「書く能力」は都を下回っており、「目的や意図に応じて根拠を明確にする」意識が身につけていない。	「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」は個人差が大きいと、小テストや家庭学習などで反復練習を重ねることで全体的な底上げを図りたい。「書くこと」の領域が低い。授業での取り組みの機会を増やしながら、生徒が苦手とする部分や習熟度の低いスキルを見極めていく。
	第3学年	どの観点で見ても全国の平均点を上回ることができているが、「書く能力」の観点においては、他の領域などと比較しても差が小さい。正答率自体は悪い数字ではない。記述式の問題にも取り組める生徒が多いため、無解答率も多くて2.2%と、極めて少ない。どの生徒も書くことに対しての抵抗感はあまりないようである。	「書くこと」の領域において、短答式となると、少々正答率が下がってしまう。必要な情報の取捨選択ができないことが予想されるため、出題者の意図を含めて考えるように、問題に取り組む意識をもたせる。また、文中の言葉をよく吟味し、文中で用いる指導を行う。
数学	第1学年	観点によっての目標値との顕著な差はないが、問題ごとの正答率が低いものは、「技能」や「見方や考え方」の問題が多い。	数と計算の分野が目標値を大きく下回っている。原因として、小数・分数の計算や整数の性質（最小公倍数など）の理解が不十分であることがわかる。
	第2学年	技能で少し都平均を下回ったのは、基礎基本が十分身につけていないと考えられる。数学的な見方や考え方は都平均と同等であった。知識・理解の中でも、活用する問題で正答率が落ち込むのは、定理・法則の理解に裏付けられた知識を習得していないと考えられる。	数量の計算についてその根拠となる性質や意味の理解が不十分な生徒がみられる。いくつかの領域にまたがるような問題で正答率が落ち込むのは、式、図、表等を活用し、既習の知識、技能を関連づけながら統合的に考える力が身につけていないと考えられる。
	第3学年	全観点において、東京都・全国の正答率を上回っているが、数学的な見方や考え方の正答率が59.4%と技能(70.6%)知識理解(82.6%)と比べると正答率が思わしくない。基礎的な計算力・知識は身につけているが応用的な力が不足している。	全領域について東京都・全国の正答率を上回っているが、関数の領域でグラフを読み取って説明する力・資料の活用の領域で資料を読み取って説明する力がそれぞれ正答率が50%を割り込んでいる。グラフや資料を活用して自分の考えをまとめて記述する力が不足している。

英語	第2学年	知識・理解の観点の正答率が低い。全体的に語彙や文法知識の定着に課題がある。正確なスペルを覚えていなかったり、英語の語順などに間違いが見られた。口頭で理解できる単語なども書くことができないことが多く、英語を書く活動が不足しているようだ。	書く領域の問題で、過去時制を正しく使い正答する率が低かった。同じく書く領域において、日常生活について問われ、正しく答えることがあまりできていなかった。
	第3学年	観点による正解率が低かったのは、表現の能力である。条件を満たす正解の英文を書くことができなかった。また、文法的な誤りやスペルミス等で点数を落としていた。	聞くことの領域の分野がかるうじて下回っていた。情報を正確に聞きとることが劣っていた。また、聞いて把握した内容について、英文で答える問題は無回答率が高かった。
社会	第2学年	観点別の結果は思考・判断・表現が55.6%（東京都平均との差+7.1%）、技能68.0%（同+6.5%）、知識・理解49.2%（同+8.3%）と、懸念していた思考・判断・表現を含めて都の平均を上回っていた。一方で、知識・理解については3観点中最も低い得点率であった。都の平均からも、問題が難しかったことがうかがえるが、発展的な内容に関する知識については十分ではないことを示している。学習事項を増やす必要がある。	領域別に正答率を見ると、地理的分野よりも歴史的分野において正答率が低かった。特に、古代文明に関する大問では、三問中二問で正答率が40.0%以下であった。地理的分野と比較すると歴史的分野は、既習単元と現在の単元のつながりが薄いと生徒に感じさせていることが、一年次の最初にやる当該分野の低得点率につながったと考えられる。そのため、歴史の授業において、他時代とのつながりを生徒に意識させることが必要である。
理科	第2学年	授業では積極的に発言したり、実験中にも活発に意見交換等が出来ており、大変意欲的に取り組んでいる。理論的に説明することや、今まで学習した内容を踏まえて考えることに苦手意識が高く、今回の調査でも思考・表現の観点の正答率は低い。	比較的正答率の高い生物分野の正答率がそれほど高くなかったが、定期テストではそれほど正答率が低くなかったので、学習をしっかりと定着させる工夫が必要である。また、物理分野のバネに関する問題の正答率は低く、ドリル式での計算力の定着や、他教科である数学科との連携を視野に入れる必要がある。